

島田正治

十一月に入って完全に雨期は終わった。日中は濃い青空にあつい太陽、これが戻ってきた。徐々に夜が冷えはじめる。標高千五百メートルのこのチャパラ湖畔は緑も多く、一日中爽やかな風も吹く。メキシコ国内でも特に気候がよいといわれている。これはほんとうのことである。

雨期に降った雨はみな湖に流れこんで湖岸は水かさを増した。魚もふえたにちがいない。しかし、湖の汚染で魚は食べないほうがよいと言っているが湖周辺の村の人たちはみな買ってたべてはいる。

乾期になると、こんどは一滴の雨も降らなくなる。そして、まわりの風景がまたたく間に茶色になってしまう。主食のとうもろこしの刈入れもある。これは日本の稲刈りの頃の状景同じといってよい。毎年、思うのだが、どうして雨期と乾期にはっきり分かれてしまうのだろうか。自然現象の不思議さであるが誰かわかる人があったら教えてもらいたい。ひいては日本に一年春夏秋冬などの四季がどうしてあるのか。

まあ、そんなこともあって、これから先、約半年間つまり来年の五月まで雨はない。そんな気候条件の中、わたしには雨が降らない乾期のほうが制作にはよい。これは雨にたたられる心配は皆無となる。雨に降られることを気にかけることもない。外で描くわたしにはまことにありがたいことである。

道具を持って外へ出る。何か月も描きにこなかったところへ久しぶりに行ってみると、土地は開墾され、あちこちに何台ものブルドーザーが入って整地に懸命である。かつてはゴルフ場があって、大きなレストランもあった。このあたりからは湖と手前のサンアントニオ村がよく見えて何度も描きにきたところである。それが土地の整理で、もう湖も見えなくなり描く場所も失くなった。以前に何度もここへ描きにきたので熟知しているだけにまことに残念で、ここからの光景はもう描くことができなくなった。

惜しまれるが以前に描いておいてよかったと思う。この景色はもう二度と見ることはない。風景も「一期一会」の感がある。いつ、突然に消えてなくなることも十分にあるわけだ。だからこそ、今、出会ったものを描いておかないと取りかえしのつかないことにもなる。

日本の新聞を読んでいて、本の広告欄に精神科の医者である斎藤茂太さんの著書が目に入った。その本の名は「いそがない」「おこらない」だった。今まで、かつてこんな書名の本があったらどうか。それに大いに感心した。まだ本の内容も知らない。ただ題名を見ただけのことなのだが、それで大いに感動があるのは、じつは、この「いそがない」「おこらない」の二つが、現在メキシコに住んでいてこの国の人たちの気性がそっくり、ぴったり当てはまってきたのである。つまり国民性そのものであるということに結着する。逆に、これは日本人の気性にも通じてくる。「いそぐ」「せっかち」「いつもおこってばかりいる」「腹を立てる」など。ひいては、わたし自身の反省でもある。

メキシコに永く住んで、かつて喧嘩する場面を見たことがない。こちら側がなにかと腹立たしくしていても「どうして」と聞いてくる。いそがなくともよいのにやたらせかせかする。額にいつも三本筋の縦皺をつけている。日本人に多い。

だからこんな本は日本では売れるだろう。メキシコでは必要ない。題名の「いそがない」「おこらない」は、地でいっているメキシコの人たちであるから。（つづく）

ご意見・ご感想はアルテ・シマダまでお送りください。